自由図書の部　佳作

清水健壮さん　法学部法律学科１年

『死ねばいいのに』京極夏彦著　講談社

一番簡単で難しいのはただ、生きていることだ

例えば『悪の教典』の蓮実聖司や『悪人』の清水祐一などを連想したが、あくまで人間的なのである、本書の登場人物、渡来健也は。無論、上の二人もある意味とても人間的なのだが、渡来健也の場合およそどこにでもいそうな人間なのである。しかし、その決めつけをするには不安で仕方なく、ただただ本書を読み進めていくしかなかった。

本書には六人の聞き手が登場する。そして「五人目。」まではある形式に則って書かれている。物語はアサミという人物が殺され、その関係者に対し渡来健也という謎の「関係者」が話を聞くというものである。渡来健也は「アサミの話が聞きたい」という衝動だけで、知人からその家族までの多くの人に話を聞きに行く。話としてはこのようなものである。読者からすると、この渡来健也という存在には違和感を感じるだろう。しかし、章ごとに渡来健也の登場を待ちきれなくなっていく。何故か。本書が形式として取っているのは、渡来健也の「聞き手」のモノローグと、その人物の個人的な心の闇、そして渡来健也が聞き手の身勝手な考えに反論した末に本書のタイトルにもなっている、渡来健也が聞き手に投げかける衝撃の言葉。どの章でもこれらの形式が取られ、嫌な人格に入り込んで読む読者としては渡来健也という人物に「憑き物」を落としてもらいたく、だからページをめくる手を止めることができないのだ。

しかし、やはり読者はどこかに違和感を感ぜざるを得ない。渡来健也の言い分は最もに聞こえる。タイトルの言葉は人に対して言ってはいけない言葉の第一位ではないか、とも思うのだが渡来健也という人物によって繰り出されるその言葉はどこか心地いいのだ。だが、「悪いンすけど、俺、頭悪いし、能く解んねーんだけど(略)」などの言葉、そして、「聞き手」が自分の心の内を最終的に全て話してしまうことから、じわじわと読者は渡来健也に恐怖を抱き始める。渡来健也に対して何をしても反論ができない。さらに、本書の中でも、そのような土俵や考え方を用意する人間に根本から疑問を投げかける。世の中に対し無関心な男は全てにおいて間違えることがない気がしてくるのだ。ところで、この形式に気づいた

読者は、殺人事件は解決されるのだろうか、という不安も覚える。ただ、「聞き手」の生き方に渡来健也が疑問を投げかけ、去っていくだけの話に終始するのではないか、と。確かに「五人目。」の最後まで、犯人の輪郭すら浮かんでこない。しかし「五人目。」のラスト二行でアサミを殺した犯人が唐突に姿を現す。渡来健也によって、ここまでの話で価値観を揺さぶられ続けた読者は足元が崩れ去る感覚を覚える。問題は書きおろしの「六人目。」である。この章は読み始めて、今までの形式と微妙に違うことがわかる。ほぼネタバレとなってしまうが、言及のためなので書くと、犯人の弁護士が聞き手となる。そこで読者も聞き手と同様動機に疑問を持つ。ラストまで読み進めると、例の言葉は回想の中でアサミに投げかけられることが分かり、動機も明らかになるのだ……アサミが、怖かったという。

個人的にはこの話が、死にたい人間にあえて、タイトルのこの言葉を投げかけ自省させるというものだと思っていたのだが、形式としては真逆であり、その実、本質は同じであった。しかし、アサミが死んだ本当の理由が分かった時、渡来健也に対する恐怖を上回る「人間的な恐怖」が存在することが分かる。それは「死ぬことに対する恐怖」かもしれないし「生きることに対する恐怖」かもしれないのだ。